

追悼文

生瀬さん、ありがとう。

元本学文学部教員 横 井 清

近年、あなたのご関心が「傷痍軍人」の問題に向いていることは熟知していました。やはり一貫してあなたは、身体障害者としての立場から身障者問題に目を凝らし、発言するのを終生の目標とされました。数多知友の方々には、あなたがその方面で活躍し、情熱をもって語り続けられるのは至極当然と映ったことでしょう。けれども私には、あなたの懸命な活動を耳にし、新しい論文の内容を追うにつけ、あなた自身が覚悟して抱え込まれた課題の重さとか深刻さとかがただならぬものだったことを痛感させられたのでした。

これはあなたもきつとご記憶だったでしょうが、私は或る重要な一点で確実に、あなたの人生行路に影響を及ぼしてしまっていました。詳細は割愛しますが或る時の対話であなたは、近世経済史や部落史の研究の手詰まりについて悩みを告げられ、それに対して私は、何故あなたは身体障害者の問題に向き合おうとしないのか、自分自身も置かれてきた厳しい現実からは目を逸らせてきたのではないかと.....などと、偉そうに迫りました。それに対してあなたは、しばらく黙り込んだ後、「よくわかった」と答えられました。その後、逐年顕著になったあなたの研究・教育の両面にわたる実績を顧みれば、あの日があなたの研究生生活、ならびに人生行路の転換点だったと思えてなりません。

そのような対話が成り立ち得たのは、それまで幾年かにわたる大阪市東住吉区での共同研究会と焼き肉を摘みながらの懇談の場に恵まれていたからこそですが、そこで私は独特の口調のみならず、箸の上げ下ろしから松葉杖歩行の作法にいたるまで、あなたの一挙手一投足をつうじて実に多くの教示を

得ていました。むろん、それに対する健常者の側の即座の反応や態度、曲折のある思惑のことをも含めてではありましたが。

いま、惜しまれて亡き数に入られたあなたが、生前に電動の車椅子を駆って大学正門から家路へと繋がる和泉市緑が丘の坂道をゆっくりと遠のいて行かれたさいの、あの小さな後ろ姿を臉に浮かべながら、心からなる謝意を捧げ、ご冥福を祈ります。